

清

せい せい

政

57

御製

慰靈碑の志に広がる水俣の
海青くして静かなりけり

□式典□

去る平成二十六年六月二十三日、神道政治連盟京都府本部の第二十八回会員大会が、ご来賓や関係者約三百五十名が出席して開催された。

第一部の大会は、後藤副幹事長の司会で進行し、国旗儀礼、花房副本部長の開会の辞、神宮遙拝、国歌斉唱と続き、林秀俊本部長が「教育勅語」を厳かに奉読した。

式辞では、林本部長が「私達の思いをしつかりと政治に届け、そして神政連が掲げる重要課題の解決には、同志議員の働ける環境を作る必要がある。春の統一地方選挙においても関係各位の絶え間ないご支援を」と訴えた。次に来賓の紹介があり、長曾我部延昭神道政治連盟会長、西田昌司、有村治子両参議院議員、寺田一博京都市神道議員連盟会長より鄭重なる祝辞を頂戴した。祝電披露の後、梶幹事長より会務報告がなされ、国旗儀礼をもって、第一部の大会を終了した。

□講演会□

二年後の

憲法改正の実現を！

講師 法学者・日本大学教授
百地 章 先生

◆今、なぜ「憲法改正」が必要か？

現在、世界には百八十八カ国の憲法があります。日本国憲法は十四番目に古い。さらに一度も改正されていません。憲法ができて七十年近く経って、多くの国民が現実との間に大きなギャップを感じるのも当然です。

この憲法の最大の欠陥は、国防を始め国家の緊急時の規定がないことです。東日本大震災時、悲しみを抑え節度正しく行動する被災者の姿に国際社会が感動し、日本人の高い道徳性と精神性が見直されました。諸外国であれば略奪や暴動が横行します。その為自然災害だけでなくあらゆる国家の緊急時に対応するため、憲法に特別の規定を設けています。



先進国で日本だけがこのような規定がありませんが今後は必要でしょう。

また、手続的にも重大な欠陥があります。GHQが日本を弱体化するために作り上げたのが今の憲法です。主権の無い占領下にGH

Qの圧力によって作られたわけですから、これをまともな自主憲法とはいえません。前文は「再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意し、…この憲法を確定する」つまり、GHQによる「敗戦史観」の押付けで、独善的史観にたって作られた詫び証文です。「個人」を絶対視し、「国家・家族」を軽視する現行憲法では国家が混乱し、家族が崩壊するのも当然のことでしょう。真の独立国家として再生させるため、憲法を抜本的に見直す必要があります。

◆憲法改正に向けて

【前文について】

二千年以上にわたって、皇室を中心に繁栄と発展をとげてきたわが国の歴史と伝統を堂々と誇りたいあげていく必要があります。また、わが国の「安全」だけでなく「国家の存立」まで他国に委ねた文章も削除すべきでしょう。

【天皇について】

憲法の中に、天皇は「君主」であり、「元首」であることを明記し、公的な象徴行為について根拠規定の明文化が必要でしょう。

【防衛・安全保障】

現行憲法のままでは、わが国の平和を維持することはできません。九条一項の平和主義



は堅持し、二項を改正して、自衛隊を主権と独立を守る「軍隊」（国防軍）と位置づけ、あらゆる事態にきちんと対応していく。そして栄誉を与えることも必要です。また、徴兵などあり得ません。兵器がハイテク化している現代、素人では扱えません。現に米・仏・英・独のいずれも徴兵制を廃止して志願兵制になっています。

【憲法改正条項（九十六条）の改正】

二院制の世界主要国の改正手続きの難易度をみると、日本はアメリカと並んで一番厳しい部類に属します。昭和二十七年にわが国が独立し、憲法改正の機運が高まった昭和三十年、三十一年の衆参の選挙ですら、議会の三分の二に届きませんでした。そこで護憲派

は、議会で三分の一を確保しておけば改正の発議を阻止できると考えます。一部の議員によって、憲法改正の手続きが、改正阻止のために利用され、国民が憲法改正に参加する機会を奪っているのです。「主権者である国民の手に憲法改正要件を取り戻そう」というのが九十六条改正の目的です。

◆二年後の憲法改正実現に向けて

今、憲法改正の最大のチャンスが訪れています。安倍総理が政治力を発揮すれば憲法改正の発議は時間の問題でしょう。しかし問題は国民投票です。護憲派は各地で「九条の会」を組織するなど、国民投票での改憲阻止に備えて必死に準備しています。おそらく改憲派は平成二十八年の衆参同日選挙に憲法改正の国民投票をぶつけるでしょう。日本会議や神政連も二年後の憲法改正をめざして動き出しました。現在、国会議員の署名も過半数近く集まり、地方議会においても憲法改正促進の決議が次々となされています。

皆さまも、日本の危機を救い、「日本を取り戻す」ため、そして子供たちや孫たちに「誇りある、豊かで夢のある、強い日本」を伝えていくため、今こそ憲法改正に立ち上がらうではありませんか。

(神尾和俊)